

水稲 (C3型) とトウモロコシ (C4型光合成)

一地球温暖化対策?一

https://l-hospitalier.github.io

<mark>【カルビン回路】</mark>植物の光合成は太陽エネルギー固定の唯一の方法で、全ての生物はエ ネルギーをこのシステムに依存する。 光合成には明反応(light reaction) とカルビン とベンソンが解明した暗反応(dark reaction、右下図)があり前者が光エネルギーの固 定、後者が糖合成を担う。 葉緑体の明反応は光化学系 I (PSI) で 700 nm 以下の波 長の光で NADP⁺を NADPH に変換、光化学系 II (PS II) で 680 nm 以下の波長の光で H₂O から電子を取り去り H⁺ (と O₂)、NADPH と ATP を産生する。 暗反応の収支は NADPH と ATP を消費し6 CO₂+12 NADP+18ATP→C₆H₁₂O₆H+12NADP+18ADP+18Pi。 明反応からの最終的収支は 6H₂O+6CO₂→C₀H₁₂O₀ + 6O₂。【RuBisCo】ルビスコ、リ ブロース-ビスリン酸カルボキシラーゼ/オキシゲナーゼ (riburose-1,5-bisphosphate carboxylase/oxygenase) は地上で最も多いタンパク質で暗反応 (カル

ビン回路)の CO₂ 固定の中心。【C3 型と C4 型植物】世界 3 大穀物 はトウモロコシ、小麦、米。 この中ではトウモロコシだけが C4型 で他は C3 型。 イネ科植物のトウモロコシやサトウキビは 28℃以上 の高温乾燥で効率よく CO₂を吸収、O₂と糖を産生。 28℃以下では C3

型は光吸収が無い時に ATP18 分子で 6 単糖を 1 分子合成し C4 型の 24 分 子より高効率。 1950~60 年にコーチャックとカルピロフによりカルピン回路

の前段階に CO₂の濃縮、固定が示され、1966 年に MD ハッチ(豪) と CR スラックに より炭素 4 原子(C4)のオキサロ酢酸を経由する回路が明らかになった。 カルビン回 路だけで糖合成する植物はルビスコにより 5 炭素のリブロース 1,5-ビスリン酸に CO。 が結合して 2 分子の 3-ホスホグリセリン酸(3 炭素)を生成するので C3 植物と呼ばれ る。 C4 植物でも CO₂ 固定は葉緑体のカルビン回路によるが、前処理として葉肉細胞 のホスホエノールピルビン酸(PEP)カルボキシラーゼでPEPにCO2を結合し4炭素 のオキサロ酢酸を合成貯蔵(植物によりリンゴ酸に変換)、維管束鞘細胞へ輸送する。 リンゴ酸やオキサロ酢酸は維管束鞘細胞で脱炭酸酵素(デヒドロゲナーゼ)により CO。

を放出。 C4型の維管東鞘細胞には葉緑体(カルビン回路)があり、ここで

A) C₃植物の葉の細胞配列

B) C₄植物の葉の細胞配列

上部表皮 柵状葉肉細胞はルビスコ を持ちCO₂をRuBPに固 定して3PGを産生する 維管束鞘細胞は葉緑体を少数 しか持たずルビスコを持たな い。CO2を固定しない 海綿状葉肉細胞 下部表皮

糖を合成。 この前処理系により C4 型では高温乾燥で気孔を 閉じてもカルビン回路に持続的な CO₂供給が可能(C4 植物 は維管束鞘細胞が発達しており見た目に葉脈が太い)。 C4 植物は高温乾燥に強くトウモロコシは熱帯、亜熱帯の主要穀 物。 小麦や稲も PEP カルボキシラーゼの遺伝子配列を持ち

C4 経路の起源は古いと考えられる。 進化の 過程での選択であろう*1。 右はトウモロコシと 稲の葉の窒素含有量と光合成速度の関係。

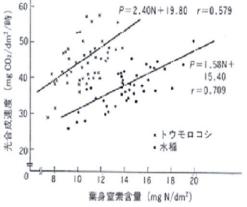
葉肉細胞はPEPカルボキシラーゼ いう酸素を持つ。この酸素は COoとPEPの反応を触媒し、4炭 素分子オキサロ酢酸を産生する

維管束鞘細胞はルビスコを持ち、 ルビスコはRuBPとオキサロ酢酸 から遊離したCO2との反応を触媒 する

葉肉細胞と維管束鞘細胞は近くに 存在するので、CO₂の葉肉細胞か ら維管束鞘細胞への移行が可能と なる

強いサボテンなどの多肉植物で CAM 型光合成 (Crassulacean Acid Metabolism) を行う植物もある。

^{*1} EU は 3 to 4 project で稲の C4 化を研究中。



#290